

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平4-327857

(43) 公開日 平成4年(1992)11月17日

(51) Int.Cl.⁵

A 6 1 M 1/28

識別記号

庁内整理番号

9052-4C

F I

技術表示箇所

審査請求 未請求 請求項の数 3 (全 6 頁)

(21) 出願番号 特願平3-125484

(22) 出願日 平成3年(1991)4月26日

(71) 出願人 000135036

株式会社ニツシヨー

大阪府大阪市北区本庄西3丁目9番3号

(72) 発明者 小平 精吾

大阪市北区本庄西3丁目9番3号 株式会
社ニツシヨー内

(72) 発明者 増田 利明

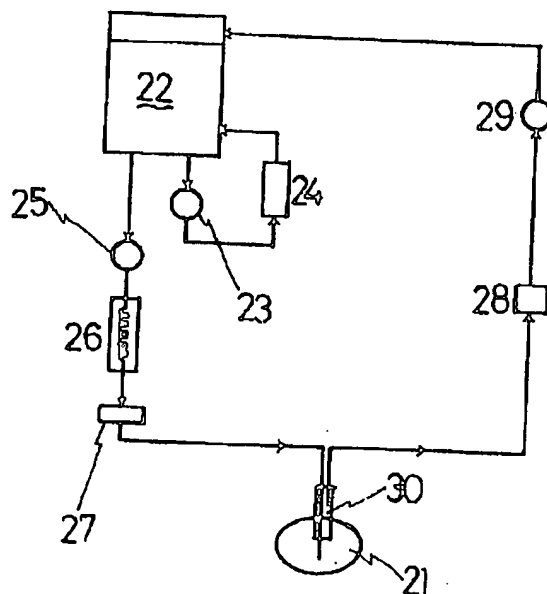
大阪市北区本庄西3丁目9番3号 株式会
社ニツシヨー内

(54) 【発明の名称】 腹膜透析装置

(57) 【要約】

【目的】 血液尿素窒素 (BUN) の変動が少なく、透析効率の高い人工腎治療装置を提供すること。

【構成】 腹腔内に常時挿入されるカテーテルの内腔が、流入導管と連結する透析液注入腔部と、流出導管と連結する腹腔内透析液排出腔部とに分離されてなる腹膜透析装置である。カテーテルが透析液流入口と腹腔内透析液流出口の2つの導口を有するダブルルーメンカテーテルからなるために、腹腔内透析液を排出しながら同時に透析液を腹腔に注入することができ、連続して腹膜透析を行うことができる。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 透析液を腹腔へ注入するための流入導管と、腹腔内に常時挿入されるカテーテルと、腹腔内透析液を腹腔から取り出すための流出導管と、流入導管および流出導管とカテーテルとを連結するための管継手置とからなる腹膜透析装置において、カテーテルの内腔が流入導管と連結する透析液注入腔部と、流出導管と連結する腹腔内透析液排出腔部とに分離されてなる腹膜透析装置。

【請求項2】 新鮮透析液を腹腔へ注入し腹腔内透析液を排出する機構からなる腹膜透析装置において、腹腔へ注入する透析液量と腹腔から排出する腹腔内透析液量とがほぼ同量になるように調整されてなる請求項1または2記載の腹膜透析装置。

【請求項3】 透析液を貯留する容器、流入導管、カテーテル、腹腔および流出導管とが結ばれてなる閉回路を透析液が循環する機構からなる請求項1または2記載の腹膜透析装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は腹膜透析装置に関し、更に詳しくは夜間の休眠中、または在宅において腹膜での透析液の注入および排液を同時に連続的に行うことができる腹膜透析装置に関する。

【0002】

【従来の技術】 連続的人工腎の治療として、連続的腹膜透析(CAPD)や急性腎不全患者等を対象にした連続的血液濾過(CHF)等が知られている。それらの1日の低分子量物質、たとえば尿素のクリアランスは、CAPDの場合、1日に2リットルの透析液を4回交換し除水量を薬液2リットルとしても最大10リットル/日である。また置換液を使用したCHFでは尿素の血中濃度を100mg/dl以下に維持するのに必要な置換液量は最低10リットル/日必要である。更に、間歇的治療である血液透析(BD)においては、血液尿素窒素(BUN)のクリアランスを150ml/分とし、週3回、1日4時間透析した時の1週間の累積クリアランスから1日当たりのクリアランスを算出すると15.4リットル/日に相当するようになる。

【0003】 すなわち現行的人工腎の性能はせいぜい10～15リットル/日で生体腎の尿素の1日当たりのクリアランスといわれている薬液170リットル/日に遠く及ばない。そして、これは片腎廃絶、残り片腎の4/5以上が機能停止した状態に相当し生体腎の性能に少しでも近づく人工腎の開発が要望されてきた。一方、血液透析(BD)においては図5の1週間3回、1日4時間透析した時の人体の血液尿素窒素(BUN)の変化を示した図にみられるように、BUN値は大きく変動しており、この変動が全ての合併症を引き起こす原因になっている。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】 かかる現行的人工腎の

課題を解決するためには連続的治療による人工腎システムの開発が不可欠である。そのためには昼間患者が活動しながら人工腎の治療ができ、夜間は休眠しながらでも透析ができる人工腎の治療が必須の要件である。本発明者の一人は、かかる課題を解決するために鋭意研究した結果、昼間は図6に示す連続再循環腹膜透析と濾過器とを組み合わせた小型で携帯可能な腹膜濾過装置を使用し、夜間は図7に示す昼間使用した濾過器の濾液側に透析液を流し透析器として使用することによって、昼夜断続的に治療を行えることを見出し既に特許出願した(特願平第2-316652号)。この腹膜透析装置は分離膜からなる透析器と腹膜透析とを併用して昼夜連続的に血液透析治療をしているために、尿素の1日当たりのクリアランスは現行のBDと比較して大幅に向上し、BUN値の大きな変動が原因となって起こる種々の合併症も少なくなった。

【0005】 しかしながら、この透析装置は分離膜からなる透析器を併用しているために血液透析の拡散効率が低下し、血液中の尿素や β_2 -ミクログロブリンのクリアランスが低くなる問題があった。本発明の目的は腹腔への透析液の注入と腹腔内透析液の排出とを同時に連続的に行うことによって、透析効率の高い人工腎治療ができる装置を提供することである。

【0006】

【課題を解決するための課題】 すなわち、本発明は透析液を腹腔へ注入するための流入導管と、腹腔内に常時挿入されるカテーテルと、腹腔内透析液を腹腔から取り出すための流出導管と、流入導管および流出導管とカテーテルとを連結するための管継手置とからなる腹膜透析装置において、カテーテルの内腔が流入導管と連結する透析液注入腔部と、流出導管と連結する腹腔内透析液排出腔部とに分離されてなる腹膜透析装置である。

【0007】 また、本発明は前記腹膜透析装置において、新鮮透析液を腹腔へ注入し腹腔内透析液を排出する機構からなる腹膜透析装置において、腹腔へ注入する透析液量と腹腔から排出する腹腔内透析液量とがほぼ同量になるように調整されてなる腹膜透析装置である。更に本発明は前記腹膜透析装置において、透析液を貯留する容器、流入導管、カテーテル、腹腔および流出導管とが結ばれてなる閉回路を透析液が循環する機構からなる腹膜透析装置である。

【0008】

【作用】 本発明は腹腔内に供給された透析液が腹膜を介して血液と接触し、腹膜が透過膜の作用をして血液中の代謝生成物が腹腔内に透過されて、腹腔内透析液となる。腹腔内透析液はそのまま廃棄されるか、あるいは透析液貯蔵容器に戻って透析液と混合され腹腔との間を循環しながら腹膜透析が行われる。本発明は腹腔内に常時挿入されるカテーテルが透析液流入口と腹腔内透析液流出口の2つの導口を有する多重管カテーテル、いわゆる

ダブルルーメンカテーテルからなるために腹腔内透析液を排出しながら同時に透析液を腹腔に注入することができ、連続して腹膜透析を行うことができる。そのために透析液の腹腔での注入と排液とを交互に数回繰り返して行う従来の腹膜透析と比較してBUN 値の変動が少なく、透析効率も高い。本発明は夜間の休居中、または在宅において連続的に行う腹膜透析であり、昼間の活動期間中は透析液を腹腔内に滞留させて腹膜透析を行う。

【0009】

【実施例】以下実施例により本発明の一例を説明する。図1は本発明の一例を示すダブルルーメンカテーテルの使用状態を示す説明図であり、図2は透析液を循環しながら腹膜透析を行う場合の説明図であり、図3は新鮮透析液を腹腔に注入し、腹腔内透析液を排液する腹膜透析を行う場合の一例を示す説明図であり、図4は新鮮透析液を腹腔に注入し、腹腔内透析液を排液する腹膜透析を行う場合の他の実施例を示す説明図であり、図5は間歇的血液透析を一週間行った場合のBUN の経時変化を示すグラフであり、図6は特願平第2-316652号で特許出願した昼間活動しながら行う腹膜透析装置の説明図であり、図7は特願平第2-316652号で特許出願した夜間の休

眠中に行う腹膜透析装置の説明図である。

【0010】図中1、21、31および61は腹腔、3は透析液注入腔部、4は腹腔内透析液排出腔部、7は流入導管、8は流出導管、9および10は管継手、22、32および62は透析液貯蔵容器、24は紫外線ランプ、26、33および63は加温器、27、49および64は除菌フィルター、28、50および67は濁度センサー、30、52および66はダブルルーメンカテーテルを示す。

【0011】図1はダブルルーメンカテーテルの使用状態を示す説明図である。ダブルルーメンカテーテルは外管とこの管内を挿通する内管とからなり、外管挿外の内管と外管の管壁に設けられた複数の穿孔から液体の注入および排出が行われる構造をしている。ダブルルーメンカテーテルは表皮2から腹腔1内に外管および内管の先端部が挿入され、常時体内に植え込まれた状態になっている。腹腔内のダブルルーメンカテーテルの内管の管壁には少なくとも1個の透析液注入孔5、また外管の管壁には少なくとも1個の腹腔内透析液の排液孔6が複数個穿孔されて設けられている。ダブルルーメンカテーテルの他端は外管を挿通して外部に露出した内管および外管とが開口してあり、その先端には管継手である流入部コネクター10および流出部コネクター9が設けられ、夫々流入導管7および流出導管8が嵌着されている。流入部コネクター10は内管の開口端の外壁面に捻子山を設け、流入導管7の内腔を嵌着したものであり、流出部コネクター9は外管の開口端の内腔に外面が捻子山構造をした継手が挿入され、内管の開口端から突出した継手部に流出導管8の内腔が嵌着されるようになっている。流出部コネクター9および流出部コネクター10は昼間の活

動期にはキャップ等で嵌着されて閉鎖されている。このようなキャップとしては実開昭第64-19445号公報に記載されているようなキャップが確固に嵌着されて好ましい。

【0012】透析液は流入導管7からダブルルーメンカテーテルの内管の中空部である注入液腔部3を通り、注入液孔5から腹腔1内に注入される。腹膜（図示せず）を介して血液と接触し血液中の代謝生成物を透過してなる腹腔内透析液は排液口6から外管の中空部である排液腔部4を通り、流出導管8から廃棄されるかまたは透析液貯蔵容器に戻り透析液と混合される。透析液の腹腔への注入と腹腔内透析液の排出は同時に連続して行われるが、必要により内管の注入液腔部3内に逆止弁を設けて腹腔内透析液が注入液腔部3へ流入するのを防止する手段を設けてもよい。図1ではダブルルーメンカテーテルは外管とこの管内を挿通する内管とからなる構造をしているが、カテーテルの内腔がシート等で分離されて2室からなり、その先端付近の側壁には夫々複数個の側孔が設けられ他端は導管が各室に挿通またはコネクターを介して嵌着される構造でもよい。

【0013】図2は透析液を循環しながら腹膜透析を行う場合の腹膜透析の説明図である。透析液貯蔵容器22内には透析液が貯蔵されており、循環ポンプ23によって腹腔21から戻ってくる腹腔内透析液と混合されるようになっている。貯蔵容器22と循環ポンプ23の循環ラインには紫外線ランプ24が設けられ、透析液が紫外線によって滅菌されるようになっている。透析液貯蔵容器22中の透析液は注入液ポンプ25によってダブルルーメンカテーテル30の注入液腔部から腹腔21へ供給される。その途中透析液は加温器26によって加温され、次いで除菌フィルター27によって細菌が除去され腹腔21内へ細菌が侵入して腹膜炎を起こすのを防止する。腹腔21内で腹膜を介して血液中の代謝生成物を透析して得られた腹腔内透析液はダブルルーメンカテーテル30の排液腔部から排液ポンプ29によって透析液貯蔵容器22に戻り容器22内の透析液と混合される。その途中、濁度センサー28が設けられ腹腔内透析液の濁度を測定することによって腹腔内の炎症の発生等を確認する。図2のような透析液循環方式の腹膜透析は透析液貯蔵容器22に多量の透析液が貯蔵されて使用される場合に好ましい。透析液量としては20～200 リットル、好ましくは40～120 リットルである。透析液の腹腔への供給をダブルルーメンカテーテルを介して注入と排液を行うと腹膜透析を高い透析効率で行うことができる。

【0014】図3は新鮮透析液をダブルルーメンカテーテルを介して連続して腹腔へ注入し、同時に腹腔内透析液を廃棄する腹膜透析の一例を示す説明図である。透析液貯蔵容器32には新鮮透析液が貯蔵され加温器33で加温されて等流量ポンプであるペローポンプの第1ペロー部45に供給される。ペローポンプは同容量の第1ペロー部

45と第2ペロー部46とがクランクモーター42によって左右にペロー位置が伸縮する構造をしており、それによって腹腔31への新鮮透析液の注入量と腹腔内透析液の排液量をほぼ同等に調節することができる。図3において、第1ペロー部45と第2ペロー部46がクランクモーター42によって左右にペロー位置が伸縮してなる第1ペローポンプと、第3ペロー部47と第4ペロー部48がクランクモーター43とによって形成される第2ペローポンプとによって腹腔31への新鮮透析液の供給量と腹腔内透析液の排液量がほぼ等量に調節されるようになっている。

【0015】図3において、バルブ34~41の白色で示す34、37、38および40は開放状態、黒色で示す35、36、39および41は閉鎖状態を示す。図3の状態は透析貯蔵容器32から新鮮透析液が加温器33によって加温されて第1ペロー部45に流入され、第2ペロー部46に予め充填されていた腹腔内透析液はバルブ40から排液容器51へ廃棄される。一方、第2ペローポンプでは第3ペロー部47に予め充填されていた新鮮透析液がバルブ37を経て除菌フィルター49で除菌され腹腔31に注入される。腹腔31内の腹腔内透析液は濁度センサー50で濁度を測定されてバルブ38を経て第4ペロー部48に流入する。各ペロー部は夫々同容量であり、一連の操作が終了すると開放状態のバルブが閉鎖状態に、閉鎖状態のバルブが開放状態に変わり、第1ペローポンプと第2ペローポンプの操作が逆になって同じような操作を行う。

【0016】図4は新鮮透析液をダブルルーメンカテーテルを介して連続して腹腔へ注入し同時に腹腔内透析液を廃棄する腹膜透析において、等液量ポンプとして2連式ローラポンプを使用した場合の説明図である。透析液貯蔵容器62には新鮮透析液が貯蔵され、加温器63で加温された後に除菌フィルター64で細菌が除去され、2連式ローラポンプ65によってダブルルーメンカテーテル66を経て腹腔61に注入される。2連式ローラポンプは同じ内径からなる流入導管(チューブ)と流出導管(チューブ)を1つのローラポンプに2本掛けしたポンプであって、チューブ内径が同じであるので腹腔61へ注入される透析液量と腹腔61から排出される腹腔内透析液量とはほぼ同一に調節される。腹腔61から排出された腹腔内透析液は濁度センサー67で濁度を測定した後、排液容器68で廃棄される。

【0017】

【実施例1】図2において、透析液貯蔵容器22に新鮮透析液50リットルを貯蔵し、加温器26で透析液を体温に加温し、毎分100 mlの速度で腹腔21へ注入し、腹腔内透析液を同じ速度で腹腔21から排出し透析液貯蔵容器22へ戻し、容器内の透析液と循環ポンプ23を使用して混合しながら腹膜透析を8時間行った。次いで、腹腔内の透析液を排液バッグに排液した後、別途新鮮透析液2リットルを腹腔に注入し16時間腹腔内で腹膜透析をした。合計24時間の腹膜透析で得られた尿素および β_2 -ミクログロブ

リンのクリアランスを表1に示す。

【0018】

【実施例2】図4において、新鮮透析液を毎分100 mlの速度で腹腔61へ注入し、腹腔内透析液を同じ速度で腹腔21から排出し排液容器68へ排液する腹膜透析を8時間行った。次いで新鮮透析液2リットルを腹腔に注入したまま16時間腹腔内で腹膜透析を行った。合計24時間の腹膜透析で得られた尿素および β_2 -ミクログロブリンのクリアランスを表1に示す。

10 【0019】

【比較例1】図6の腹膜濾過装置において、腹腔71に2リットルの新鮮透析液を注入した。第1濾過器72の第1濾過膜の孔径は14 μ mで膜面積は0.2 m^2 である。第1濾過器72を通過した腹腔内透析液は第2濾過器73の第2濾過液室79に供給され、第1濾過器72の第1濾過液から第2濾過器73の第2濾過膜で濾過された第2濾過液と混合されて腹腔71へ戻る。この時第2濾過器73の第2供給液室78から第1濾過液の一部が排出導管76を経て排出される。第2濾過膜の孔径は3.5 μ mで膜面積は0.2 m^2 である。循環する透析液流量は80ml/分で、第1濾過器の濾液流量は40ml/分、第2濾過器の濾液流量は38ml/分、除水流量は2ml/分で、1日に16時間濾過した。次いで夜間には図7の腹膜透析装置を使用した。第1透析器81および第2透析器82は昼間使用した図6の第1濾過器72および第2濾過器73を使用サイクラーによる透析に変更した腹膜透析装置である。第1透析器81の濾液側である第1透析液室86と第1透析液貯蔵容器83との間で処理済透析液が循環する閉回路を形成する。また第2透析器82の濾液側である第2透析液室84と第2透析液貯蔵容器84との間でも第2透析膜87を透過した処理済透析液が循環する閉回路が形成される。腹腔80から供給された腹腔内透析液は第1透析器81を通過した後、第2透析器82を通過して腹腔50に戻る閉回路を循環しながら腹膜透析が行われる。その時の循環透析液流量は100 ml/分、サイクラーの新鮮透析液流量は100 ml/分で8時間透析した。合計24時間の腹膜透析で得られた尿素および β_2 -ミクログロブリンのクリアランスを表1に示す。

【0020】

【比較例2】現行の血液透析を血液流量 150ml/分、週3回、1回4時間した時の1週間の累積クリアランスから1日当たりの尿素および β_2 -ミクログロブリンのクリアランスを換算し、その結果を表1に示す。

【0021】

【比較例3】腹腔に新鮮透析液を2リットル注入し6時間腹膜透析をした。その後、腹腔内透析液を排出し、新鮮透析液2リットルを腹腔に注入した。この操作を1日4回繰り返した後の合計24時間の腹膜透析で得られた尿素および β_2 -ミクログロブリンのクリアランスを表1に示す。クリアランスの単位はリットル/日である。

50 【0022】

【表1】

	尿 素	β_2 -ミクログロブリン
実施例 1	45.8	26.4
実施例 2	50.6	28.3
比較例 1	39.1	23.0
比較例 2	9.8	2.9
比較例 3	8 以下	8 以下

【0023】表1から明らかなように、本発明の腹膜透析装置である実施例1および2は現行の血液透析（比較例2）や腹膜灌流装置（比較例3）と比較して かに優れた透析性能を有している。また分離膜を併用した腹膜透析装置である比較例1よりも透析効率は高い結果を得た。

【0024】

【発明の効果】本発明は腹腔内に常時挿入されるカテーテルが透析液流入口と腹腔内透析液流出口の2つの導口を有する多重管カテーテル、いわゆるダブルルーメンカテーテルからなるために腹腔内透析液を排出しながら同時に透析液を腹腔に注入することができ、連続して腹膜透析を行うことができる。そのために透析液の腹腔での注入と排液とを交互に数回繰り返して行う従来の腹膜透析と比較してBUN 値の変動が少なく、透析効率も高い。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の一例を示すダブルルーメンカテーテルの使用状態を示す説明図

【図2】本発明の一例を示す透析液を循環しながら腹膜透析を行う場合の説明図

【図3】新鮮透析液を腹腔に注入し、腹腔内透析液を排

液する腹膜透析を行う場合の一例を示す説明図

【図4】新鮮透析液を腹腔に注入し、腹腔内透析液を排液する腹膜透析を行う場合の他の実施例を示す説明図

【図5】間歇的血液透析を一週間行った場合のBUN の経時変化を示すグラフ

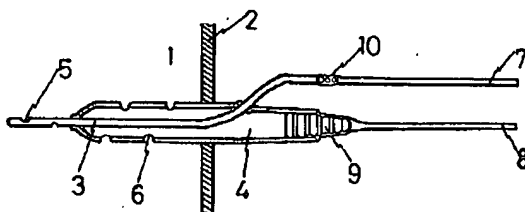
20 【図6】特願第2-316652号で特許出願した昼間活動しながら行う腹膜透析装置の説明図

【図7】特願第2-316652号で特許出願した夜間の休眠中に行う腹膜透析装置の説明図

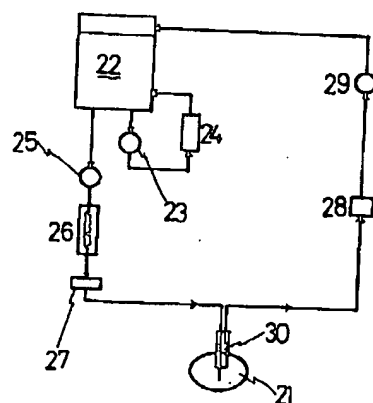
【符号の説明】

- 1、21、31、61 腹腔
- 3 透析液注入腔部
- 4 腹腔内透析液排出腔部
- 7 流入導管
- 8 流出導管
- 30 9、10 管継手
- 22、32、62 透析液貯蔵容器
- 26、33、63 加温器
- 27、49、64 除菌フィルター
- 28、50、67 濁度センサー
- 30、52、66 ダブルルーメンカテーテル

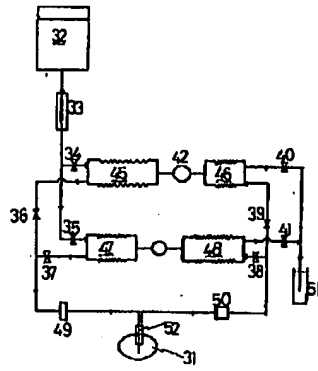
【図1】



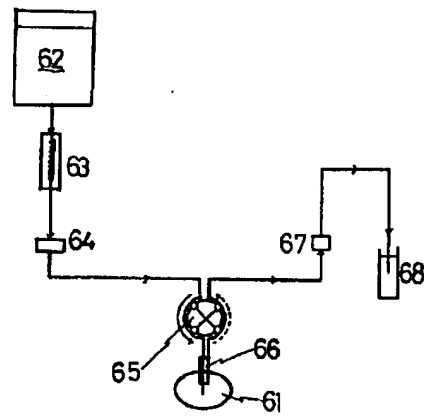
【図2】



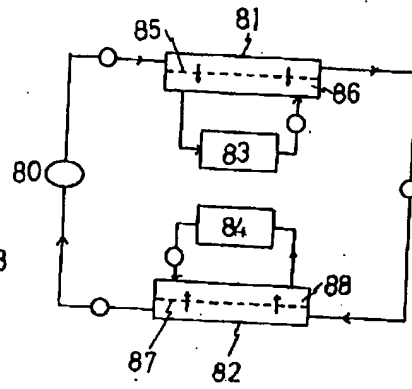
【図3】



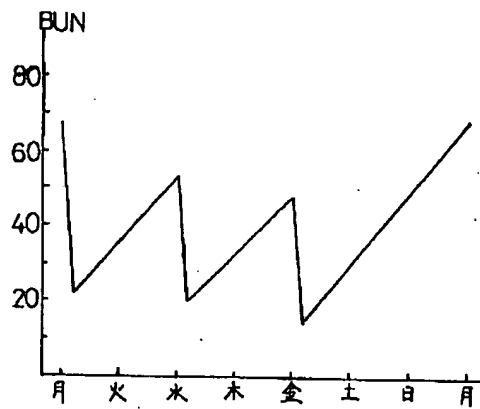
【図4】



【図7】



【図5】



【図6】

